

續銀鼎

泉鏡花作

—

不思議なる光景である。

白河はやがて、鳴きしきる蛙の聲、——其の蛙の聲もさあと響く——と、もに、さあと鳴る、流の音に分るゝ如く、汽車は恰も雨の大川をあとにして、又一息、暗い陸奥へ沈む。・・・・・眞夜中に、色澤のわるい、頬の痩せた詩人が一人、目ばかり輝かして熟と視る。

燈も夢を照すやうな、朦朧とした、車室の床に、其の赤く立ち、颯と青く伏つて、湯氣をふいて、ひら／＼と燃えるのを凝然と視て居ると、何うも、停車場で錢で買った餛飩を温め抱くのとは思はれない。

どう／＼と降る中を、ぐわうと山に飢して行く。がらんとした、古びた萌葱の車室である。護摩壇に向つて、髯髪も蓬に、針の如く逆立ち、あばら骨白

く、吐く息も黒煙の中に、夜叉羅刹を呼んで、逆法を修する呪詛の僧の舉動には似べくもない、が、我ながら銀の鍋で、ものを煮る、仙人の徒弟ぐらゐには感ずる。詩人も此では、鍛冶屋の職人に宛然だ。が、其の煮る、鑄る、錬りつゝあるは何であらう。没薬、丹、朱、香、玉、砂金の類ではない。蝦蟇の膏でもない。

と思ひつゝ、視つゝ、惑ひつゝ、恚くして錬るのは美人である。

衣繪さんだ！

と思ふと、立つ泡が、雪を震はす白い膚の爛れるやうで。．．．．園は、ぎよつとして、突附すばかりに火尖を嘗めるが如く吹消した。

疲れたやうに、吻と呼吸して、

「あゝ、飛んでもない、．．．．譬にも虚事に、衣繪さんを地獄へ落さうとした。」

假に、もし、此を煮る事、鑄る事、錬る事が、其の極度に到着した時の結晶體が、衣繪さんの姿に成るべき魔術であつても、火に掛けて煮爛らかして何とする！．．．．

鑄像家の技に、佛は銅を煮るであらう。彫刻師の鑿に、神は木を刻むであらう。が、人、女、あの華著な、衣繪さんを、詩人の煩惱が煮るのである。

「大變な事をしたぞ。」

園は、今更ながら、瞬時と雖も、心の影が、其の熱に堪へないものの如く、不意のあやまちで、怪我をさした人に吃驚するやうに、銀の蓋を、ぱつと取つた。

取ると、・・・むら／＼と一卷、渦を巻くやうに成つて、湯気か、鍋の中から、朦と立つ。立ちながら、すつと白い裳が眞直に立摩いて、中ばでふくらみを持つて、筋が凹むやうに、二條に分れようとして、軟にまた合つて、颯と濃く成るのが、肩に見え、頸脚に見えた。背筋、腰、ふくら脛。

卯の花の色うつくしく、中肉で、中背で、なよ／＼として、ふつと浮くと、黒髪之音がさつと鳴つた。「やあ、あの、もの恥をする人が、裸身なんぞ、こんな姿を、人に見せるわけはない。」

園は目を瞑つた。

矢張り見える。

「これは、不可ん。」

園は一人で頭を掉つた。　まだ消えない。

「第一、病中は、其の取亂した姿を見せるのを可厭がつて、見舞に行くのを斷られた自分ではないか。

「此は悪い。こんな處を。あゝ、濟まない。」

園はもの狂はしいまで、慌しく外套を脱いだ。トタンに、其の衣繪さんの白い幻影を包んで隠さうとしたのである。が疼々しい此の硬ばつた、雨と埃と日光をしたゝかに吸つた、甲羅生えた鼠色の大な蝙蝠。

一寸でも觸ると、其のまゝ、いきなり、白い肩を包んで、頬から衣繪さんの血を吸ひさうである、と思つたばかりでも、あゝ、滴々血が垂れる。・・・
・・結綿の鹿の子のやうに、喀血する咽喉のやうに。

で、園は引摺んで、席をやゝ遠くまで、其の外套を彼方へ投げた。

投げた時、偶と渠は、鼓打である其の従兄が、業體と言ひ、温雅で上品な優しい男の、酒に酔拂ふと、場所を選ばず、着て居る外套を脱いで、威勢よくぱつと投出す、帳場の車夫などは、おいでなすつた、と丁と心得て居るくらゐで・・・電車の中でも此を遣る。・・・下が黒羽二重の紋着と言ふ勤柄であるから、餘計人目について、乗合は一時に哄と囂す。

「何でえ、持つてけ。」と、舞袴にぴたりと肱を張つて、とろりと一睨み睨むのがお定り
と其を思出して、・・・獨りで笑つた。

そんな、妙な間があつた。それだのに、媚めかし
い湯氣の形は、卯の花のやうに、微に揺れつゝ其の
まゝであつた。

銀の鍋一つ包む、大くはないが、衣繪さんの手縫である、其の友染を、密と掛けた。項から肩と思ふあたり、ビクツと手應がある、ふつと、柔く軽く、つゝんで抱込む胸へ、嫺さと氣の重量が掛るのに、アツと思つて、腰をつく。席へ、薄い眞綿が羽二重へ、這つたやうに、さゝ．．．と唯衣の音がして、膝を組んだ足のやうに、友染の端が、席をなぞへに、たたりと片褸に成つて落ちた。――氣を失つた女が、我とゝもに倒れかゝつたやうである。

吃驚して、取つて、すつと上へ引くと、引かれた友染は、其のまゝ、仰向けに、襟の白さを蔽ひ餘るやうに、がつくりと席に寝た。

ふは／＼と其處へ靡く、湯氣の細い角の、横に漾ふ消際が、こんもりと優しい鼻を残して、ぽつと浮いて、衣繪さんの眉、口、唇、白齒。．．．あゝあの時の、死顔が、まざ／＼と、いま我が膝へ

白衣幽に、撫子と小菊の、藤紫地の裙模様の小袖

を、亡^{なき} 軀^{からだ}に掛^かけた、其^{その}のまゝの、．．．此^この友^{ゆう}染^{ぜん}よ。唯^{たゞ}其^{その}の時^{とき}は、爪^{つめ}一つ指^{ゆび}の尖^{さき}も、人^{ひと}目^めには漏^もれないで、水^{すい}底^{てい}に眠^{ねむ}つたやうに、面^{おも}影^{かげ}ばかり澄^{すみ}切^きつて居^ゐたのに、――こゝでは、散^{ちり}亂^{みだ}れた、三^{さん}ひら、五^ごひらの卵^{うで}の花^{はな}が、凄^{すこ}く動^{うご}く汽^き車^{しゃ}の底^{そこ}に、ちら／＼ちらと揺^ゆれて、指^{ゆび}の、震^{ふる}へるやうにさへ見^みらるゝ。世^よには、清^{きよ}らかな白^{しろ}歯^はを玉^{たま}と云^いふ、眞^{しん}珠^{じゆ}と云^いふ、貝^{かい}と言^いふ。．．．いま、ちらりと微^ほ笑^ゝむやうな、口^{くち}許^{もと}を漏^もるゝ齒^はは、白^{しろ}き卵^{うで}の花^{はな}の花^{はな}片^{びら}であつた。

「――膝^{ひざ}枕^{まくら}をなさい。――衣^{きぬ}繪^えさん。」
園^{その}は居^ゐ坐^{まひ}を直^{なほ}した。が、沈^{しづ}んだ顔^{かほ}に、涙^{なみだ}を流^{なが}した。
あゝ、思^{おも}出^{ひだ}す。．．．

「いくら私^{わたし}、堪^{こら}へましてもね、冷^{つめた}い汗^{あせ}が流^{なが}れるやうに、ひとりでに涙^{なみだ}が出るんですもの。御^ご病^{びやう}人^{にん}の前^{まへ}で、此^{これ}ぢやあ悪^{わる}いと思^{おも}ひますとね、尚^なほ堪^たまらなくなるんですよ。それだもんですからね。枕^{まくら}許^{もと}の小^{ちひ}さな黒^{くろ}棚^{たな}に、一^{りん}輪^{ざし}插^さがあつて、撫^{なで}子^{しこ}が活^いかつて居^ゐました。その花^{はな}へ、顔^{かほ}を押^{おし}つけるやうにして、ほろ／＼溢^{あふ}れ

る目をごまかしましてね、（西洋のでございますか、いゝ匂ですこと。）なんのつて、然う言つて——あの、優しい花ですから、葉にも、枝にも、此方の顔が隠れないで弱りましたよ——義兄さん。

と衣繪さんのもう亡くなる前だつた——たしか、三度めであつたと思ふ……従弟の細君が見舞に行つた時の音信であつた。

豫て、病氣とは聽いて居た。——其の病氣のために、衣繪さんが、若手、賣出しの洋畫家であつた、婿君と一所に、鎌倉へ出養生をして居たのは……あとで思へば、それも寂しい……行く春の頃から知つて居た。が、紫の藤より、菖蒲杜若より、鎌倉の町は、水は、其の人の出入、起居にも、ゆかりの色が添ふであらう、と床しがるのみで、まるで以て、然したる容體とは思ひもつかないで居たのに、秋の野分しば／＼して、睡られぬ長き夜の、且つ朝寒く——インキの香の、ちつと身に沁む新聞に——名門のお嬢さん、洋畫家の夫

人なれば　――　衣繪さんの　（もう其の時は歸京して居た）　重體が、玉の簾を吹ちぎり、金屏風を倒すばかり、嵐の如く世に響いた。

同じ日の夜に入つて、婿君から、先んじて親書が来て　――　病床に臥してより、衣繪はどなたにもお目に掛る事を恥かしがり申候、女氣を、あはれ、御諒察あつて、お見舞の儀はお見合せ下されたく、差繰つて申すやうながら、唯今にもお出で下さる事を當人よく存じ、特に貴兄に對しては　・　・　・　と此の趣であつた。

ある。
髪一條、身躰を忘れない人の、此は至極した事である。

婿君のふみながら、衣繪さんの心を傳へた巻紙を、繰戻すさへ、さら／＼と、緑なす黒髪の枕に亂るゝ音を感じて、取る手の冷いまで血を寒くしながらも、園は、謹んで其の意を體したのである。

折から、從弟は當流の一派とゞもに、九州地を巡

業中げふちゆうで留守るすだつた。細君さいくんが、園そのと雙方さうほうを兼ねかて見舞みまつた。其そのの三度どめの時ときの事ことなので。―― 勿論もちろん、田端たばたから歸かへりがけに、直すぐに園そのの家いへに立寄たちよつたのであるが。

「ね―― 義兄にいさん、……お可哀相かはいさうは、最もう疾とつくのむかし通越とほりこして、あんな綺麗きれな方かたが最もおなくなんなさるかと思おもふと眞個ほんたうに可惜あつたらものでならないんですもの。―― 日當ひあたりは好いいですけれど、六疊でぶのね、水晶すいしやうのやうなお部屋へやに、羽二重ばぶたへの小搔卷こがいまきを掛かけて、消えさうにお寢よつて、お色いろなんぞ、雪ゆきとも、玉たまとも、そりや透通すきとほるやうですよ。東枕ひがしまくらの白しろい切きれに、ほぐしたお髪くしの眞黒まっくろなのが濡ぬれたやうにこぼれて居ゐて、向むかうの西向にしむきの壁かへに、衣桁いかうが立たて、あります。それに目の覺さめるやうな、友染いっせん縮緬ちりめんが、反たんものを解ほどいたなりで、一種掛ひといろかつて居ゐたんです。―― 義兄にいさんの歌うたの本ほんをお讀よみなさるのと、うつくしい友染いっせんを掛物かけもののやうに取換とりかへて、衣桁いかうに掛かけて、寝ねながら御覽ごらんなさるのが何なにより樂たのしみなんですつて。―― あの方かたの魂たましひの在いらつしやる處ところも、それで知しれます。……紫むらさの雲くもの鬢たなびく空そらぢやあなくつて、

友染の霞が来て、白いお身體を包むのでせうね。――
あゝ、それにね。……義兄さんがお心づく
しの丸薬ですわね。……私が最初お見舞に行
った時、ことづかつて参りました。……あの薬
を、お婿さんの手から、葡萄酒の小さな硝子杯で飲
るんだつて、――えゝ、先刻

枕許の、矢張り其の棚にのつた、六角形の、蒔繪
の手筐をお開けなすつたんですよ。然うする

と、……あの薬包と、かはいらしい爪取剪が
一具と、……

従弟の妻は、話しながら、こみあげ／＼我慢した
のを、此の時ないじやくりして言つた。

「……他に何にもなしに、撫子と小菊の模
様の友染の袋に入つた、小さい圓い姿見と、其だけ
入つて居たんです。……お心が思ひ遣られま
すこと。」

お婿さんが、硝子杯に葡萄酒をお計んなさる間

――えゝ然うよ。……お寢室には私と三
人きり。……誰も可厭だつて、看護婦さんさ

へお頼みなさらないんださうです。第一、お醫師様も、七ツ八ツのお小さい時からおかゝりつけの方をお一人だけ……尤も有名な博士の方ださうですけれど　――

それでね、義兄さん。お婿さんが葡萄酒をお計んなさる間に、細りした手を、恚うね、頬へつけて、うつくしい目で撓めて爪を見なすつたんでせう、のびてるか何うだかつて　――凝と御覧なすつたんですがね、白い指さきへ瞳が映るやうで、そして指のさきから、すつとお月様の影がさすやうに見えました。それが、恚う、お招きなさるやうに見えるんですもの。私、ぶる／＼としたんです……

聞いて居る園が震へた。

「ですけれど、あの、お手で招かれたら、懐中へなら尚の事だし、冥土へでも、何處へでも行きかねやしますまい……と眞個に思ひました。

其の手を、密と伸して、お薬の包を持つて、片手で圓い姿見を半分、凝と視て、お色が颯と蒼ざめた時は、私はまた泣かされました。……私は自分ながら頓興な聲で言つたんですよ

「――（まあ、御覧ごらんなさいまし、撫子なでしこが、こんな
に露つゆをあげて居をりますよ。」

三

「私としては、出来るだけの事はしました。――
申してはお恥かしいやうですが、實際、此の一月
ばかりは、押通し夜も寝ませんくらゐ看病はしまし
たが。」

一室の、其處に五人居た。著名なる新聞記者、審
査員――畫家、文學者、某子爵の令夫人が一人。

――園が居た。弔禮のために、香川家を訪れた
ものが、うけつけの机も、四つばかり、應援に山を
なす中から、其處へ通された親類縁者、それ／＼、
又他方面の客は、大方別室であらう。

園が、人を分けて廊下を茶室らしい其處へ通され
た時、すぐ其の子爵夫人の、束髪に輝く金剛石と、
もに、白き牡丹の如き手巾の、目を蔽うて俯向いて
居るのを視た。

皆、黯然として、半ば瞳を閉ぢて居たのである。

「御當家でも――實に……」
「全くでございます。」

唯、いひかはされるのは、其のくらゐな事を繰返
す。時に、鶺鴒の聲がして、火桶の炭は赤けれど、
山茶花の影が寂しかった。

其處へ婿君が、紋着、袴ながら、憔悴した其の寢不足の目が血走り、ぱう／＼髪で糞れたのが、弔禮をうけに見えたのである。

「やあ．．．．何うも。」

と、がつくり俯向いた顔を上げたのを、園に向けると、

「お禮を申し上げます、―― あのお薬のためだらうと思ひます。五日以上．．．．滋養灌腸なぞは、絶対に嫌ひますから、湯水も通らないくらゐですのに、意識は明瞭で、今朝午前三時に息を引取りました一寸前にも、種々、細々と、私の膝に顔をのせて話をしまして．．．．園さんに、おなごりのおことづけまで申しました。判然して、元氣です。醫師も驚いて居ました。まるで絶食で居て、よく、こんなにと、兩三日前から、然う言はれましてな．．．．しかし、氣の毒でした。」

江戸兒は．．．．食ものには亂暴です。九死一生の時でも、鮎だ、天麩羅だつて言ふんですから。蝦が欲しい．．．．しんじよでも言ふかと思ふと、飛んでもない．．．．鬼殻焼が可いと言ふんで

す。――痛快だ！……宜しい、鬼を食つて了ひなさい、と景氣をつけて、肥つた奴を、こんがりと南京の中皿へ装込んだのを、私が氣をつけて、大事に雀つて、箸で咄めたんですが、みでは豈夫と思ふんです。馴れない料理人が、むしるのに、幾らか鎧皮が附着いて居たでせうか。一口觸つたと思ふと、舌が切れたんです。鬼殻焼を退治しようと言ふ、意氣が壮なだけ實に悲惨です。すぐに唇から口紅が溶けたやうに眞赤な血が溢れるんですものね。」

爾時は、瞼を離して、はらりと口許を手巾で蔽うて居た、某子爵夫人が頷くやうに聞き／＼、清らかな手巾を扱くにつれて、眞白な絹の、それにも血の影が映すやうに見えた。

夫人は堪へやらぬ状して、衝と肩を反して、横を向いて又目を壓へたのである。

「……え、尤も、結核は、喉頭から、もう其の時には舌までも侵して居たんださうですが。鬼殻焼……意氣が壮なだけ何うも悲惨です。

は、はア。」

と、力ちからのない、笑わらひの影かげを浮うかべて、言いつて、悵然ちやうぜんとして仰あふいで、額ひたひに逆立さかだつ頭髪とうはつを拂はたつた。

「あちらの御都合ごつがふで、お線香せんかうを。」

「一寸ちよつと、御挨拶ごあいさつを。」

園そのと審査員しんさあんが殆ど同時どうじに言いつた。

「それでは、何うぞ……」

廊下らうかを二曲ふたまがり、又半またなかばにして、縁續えんつゞきの廣間ひろまに、線香せんかうの煙けむりの中に、白しろい壇だんが高たかく築きつかれて居ゐた。袖そでと袖そでと重ねたのは、二側ふたかはに居餘ゐあまる、いづれも聲こゑなき紳士しんし淑女じゆふであつた。

順じゆんを讓ゆづつて、子爵夫人しやくふじんをさきに、次々つぎ／＼に、――

園そのは其そのの中でいつちあとに線香せんかうを手向たむけたが、手向むけながら殆ど雪ゆきの室むろかと思おもふ、然しかも香かをりの高たかき、花輪はなわの、白薔薇しろばら、白百合しらゆりの大輪たいりんの花はな瓣びらの透すきま間に、薄紅とぎいろの撫子なでしこと、藤紫ふぢむらさきの小菊こぎくが微かすかに彩いろめく、其そのの友染いうぜんを密まつと辿たどると、搔上かきあげた黒髪くろかみの毛筋けすぢを透すいて、ちらりと耳みみ朶たぶと、而なして白々しろ／＼とある領脚えりあしが、すつと寝ねて、其そのの薄化粧うすげしやうした、きめの細こまかなのさへ、ほんのりと目めに映うつつた。

まだ納棺の前である。

「香川さん。」

袴で座を開きながら、園は、堅く障子を背にした
婿君を呼んで言った。

「一寸お顔を見たいんです。」

聲の調子の掠れるまで、園は胸が轟いたのである。

が、婿君は潔く、

「え、何うぞ。――此方へ。」

とづいと立つと、逆屏風。――たしか葛の葉の
風に亂れた繪の、――端を引いて、壇の位牌の
背後を、次の室の襖との狭い間を、枕の方へ導きな
がら、

「困りました。」

「なくなられては困りましたなあ。」

と振りむき状に、ぶつきら棒に立つて、握拳で、額
を擦つたのが、惱亂した頭の髪を、搔篦りでもした
さうに見えて、煙の靡く天井を仰いだ。

「唯々、お察し申上げます。」

「は。」

と言つて、膝をついて、

「衣繪ちゃん、——園さんです。」

と、白いものを衝と取つた。

眉毛を長く、睫毛を濃く、彼方を頂に、満座の客

を背にして、其の背の方は、花輪が隔てゝ、誰にも

見えない。——此方に斜くらみな横顔で、鼻筋

がスツとして、微笑んだやうな白齒が見えた。——

妹が二人ある。其の人たちの優しさに、髪を櫛巻

のやうにして、薄化粧に紅をさした。

「衣繪さん。」

と心で言つて、思はず、直と寄つた膝が、うつか

り、袖と思ふ搔卷の友染に觸れると、白羽二重の小

波が、青く水のやうに其の襟にかゝつた。

屈みかゝつて、上から差覗く、目に涙の媚君と、

微に仰いだ衣繪さんの顔と、世に唯、此の時三人で

あつた。

「……お静に、お静に、然やうなら……」

ハツと息^{いき}して、立^たつて、引返^{ひきか}す時^{とき}、
・ ・ ・ ・

今^{こんど}度は園^{その}が云^いつた。

「私^{わたし}も困^{こま}ります。」

「寂^{さび}しくつて、世^{せけん}間^{かん}が暗^{くら}いやうです。――衣^{きぬ}繪^ゑさんはおなくなりなさいました。」

繪^ゑさんはおなくなりなさいました。」

「香^{かがは}川^{せん}さん。――しかし、今^{いま}では、衣^{きぬ}繪^ゑさん

を、衣^{きぬ}繪^ゑさんを、

「私^{わたし}が、思^{おも}つても！ ・ ・ ・ ・」

愛^{あい}も、戀^{こひ}も、憧^{あこが}憬^れも、ふつゝかに、唯^{ただ}、思^{おも}ふとの

み、血^ちを絞^{しぼ}つて言^いつた。

「 ・ ・ ・ ・ 思^{おも}つても、――貴^{あなた}方は許^{ゆる}して下^{くだ}

さいますか。」

仰^{あふ}いで言^いふのを、香^{かがは}川^{せん}は、しばらく熟^{じつ}と視^みたが、

膝^{ひざ}をついて、ひたと居^あ寄^よつて、

「衣^{きぬ}繪^ゑちゃん^{ちん}が喜^{よろこ}びませう ・ ・ ・ ・ 私^{わたし}も、 ・ ・

・ ・ ・ 嬉^{うれ}しい。」

戀^{こひ}の仇^{あだ}は、雙^{なうは}方^{ほう}で手^てを取^とつた。

「あ、お顔^{かほ}を。」

振りむいて、も一度視た。

其の、面影を、――夜汽車の席の、いまこゝ

に――

「さ、膝を、膝枕をなさい、誰も居ません。」

園は、もの狂はしく、面影の白い、髪の毛の黒い、裳の、胸の、乳のふくらみのある友染を、端坐した膝に寝かして、うちつけに、明白に、且つ夢に遠慮のないやうに戀を語つた。

四

「岩沼　　―　　岩沼　　―　　」

辨當、もの賣の聲が響くと、人音近く、夜が明けたと思ふのに、目には、何も、ものが見えない。

吃驚した。

園は掻きむしるやうに窓を開けた、が、眞暗である。

「もし、もし、もし、もし、驛員の方、驛の方

―　　驛夫さん・・・・・」

とけたましく呼んだ。

「何ですか。」

「失禮ですが、私の目は何うかなつては居ないで

せうか。」

「貴方　　―　　何うかして居ますね。・・・・

確乎なさらなくつちやあ不可いぢやありません

か。」

獨言して、

「何を言つてるんだ。」

はつとすると、構内を、東雲の一天に、雪の　　―　　あとで知つた　　―　　刈田嶽の聳えたのが見えて、

目は明あきらに成なつた。

はじめて一人乗ひとり込んだ客きやくがある。

袖そででかくすやうにした時とき、鍋なべの餛飩うどんは、しかし、

線香せんかうの落おちてたまつた、灰はひのやうであつた。

水源を、岩井の大沼に發すと言ふ、浦川に架けた橋を渡つた頃である。

松島から歸途に、停車場までの間を、旅館から雇つた車夫は、昨日、日暮方に其の旅館まで、同じ停車場から送つた男と知れて、園は心易く車上で話した。

「さあ、何と言はうかな。……景色は何うだ、と聞かれて、悪いと言ふものもなからうし……。唯よかつたよ、とだけぢや、君たちの方も納るまいけれども、何しろ、私には、松島は見ても松島を論ずる資格はないのだよ。昨日も君に世話に成つたと言ふから、知つてるだらうが、薄暮合、あの時間に旅館に着いたのだから、あとは最う湯に入つて寝るばかりさ。」

園は昨日の其までは、聊か足す用があつて仙臺に居たのであつた。

「夜があけたわ、顔を洗つたわ、旅館の縁側から、築山に松の生えたのが幾つも霞の中に浮いて居る、

大な池を視めていゝなあと言つたつて、それまでだ。
――海岸へ出たからつて、波が一つ寄るぢやなし、櫻貝一つあるんぢやあない。

しかし、無理だよ。……豫て聞いても居るし、むかしの書物にも書いてある。――松島を観るのは船に限る。八百八島と言ふ島の間を、自由に青疊の上のやうに漕ぐんだと言ふから、島一つ一つ趣のかはるのも、どんなにいゝか知れやしない。魚もすら／＼泳ぐだらうし、松には藤も咲いてるさうだし、つゝじ、山吹、とり／＼だと言ふ。其の間を、船の影に驚いて、。パツと群れて水鳥が立つたり、鷗が泳いで居たり。……」

「然うで、然うで、其の通りで……。旦那。」
と、車夫は梶棒に張つた肩を聳やかした。

「船でなけりや、富山と言ふのへ上るだね。はい、其處だと、松島が残らず一目に見えますだ。」

「ださうだね。何しろ、船で巡るか、富山へ上らないぢやあ、松島の景色は論ずべからずと、ちゃんと戒められて居るんだよ。」

「何うでがすね、此から、富山へおのばりに成つ

ては、はい、一里たらずだ、一息だで。」
「いや、それよりは、早く歸つて、墓參がしたくなつた。」

「へい。」

と言つたが、乗つた客も、挽く男も、妙に黙つた。園は我ながら、餘りつきもない言をうっかり言つたのに、はつと氣が着いたほどである。

車夫は唐突に、目かくしでもされたやうに思つたらう。

陽が白く、雲が白く、空も白い。のんびりとした静寂な田畠には、土の湧出て、装するやうな蛙の聲。かた／＼かた／＼ころツ、ころツ、くわら／＼くわら、くつ／＼くつ。中でも大きさうなのが、土の氣の蒸れる處に、高く構へた腹を、恚う人の目に浮かせて、があ／＼があ／＼と太く鳴く。・・・

俚は踏切を、其の蛙の聲の上を越した。一昨日の夜を通した雨のなごりも、薄い皮一枚張つたやうに道が乾いた。

一方が小高い土手に成ると、いまゝで吹いて居た

風が留んだ。霞も霞もないのに、田畑は一面にぼう
として、日中も春の夜の朧である。薄日は弱く雲を
越さず、畔に咲いた蒲公英、咲き交る豆の花の、緋、
紫にも、ぽつりと黒い影が見えぬ。朱の木瓜はち
ら／＼と灯をともし、樹の根を包んだ石楠花は、入
日の淡い色を染めつゝ、然も日は正に午なのである。
道にさし出た、松の梢には、紫の藤かゝつて、どん
よりした遠山のみどりを分けた遅櫻は、薄墨色に濃
く咲いて、然も散敷いた花瓣は、散かさなつて根を
こんもりと包んで、薄紅い。

其の傍に、二ツ三ツ境がない墓が見える。

見つゝ、俾は、段々の田を隔てゝ、土手沿ひの徑
を遙に行くのである。

雲も、空も、皆白い。

其處へ、影のさすやうなのは、一つ一つ、百千と
數へ切れない蛙の聲である。鳴く、鳴く。

松杉、田芹、すつと伸びた酸模草の穂の、そよと
も動かないのに、溝川を蔽ふ、たんぽぽの花、豆の
つるの、忽ち一所に、さら／＼と動くのは、鮎、鱧

には揺過ぎる、――晝の水鶏が通るのであらう。
夢を見て居るやうである。

趣は違ふけれども、園は、名所にも、古跡にも、
あんな景色はまたあるまいと思ふ處を、先刻も一度
通つて來た。

――水源を岩井沼に發すと言ふ、浦川の流の末
が、廣く成つて海へ灌ぐ處に近かつた。旅館を出て
まだいく程もない處に――路の傍に、切立てた、
削つた、大な巖の、轟々と立つのを視た。或は、佛
の御厨子の如く、或は人の髑體に似て、或は禪定の
穴にも似つゝ、或は山寨の石門に似た、其の岩の根
には、一つづつ皆水を湛へて、中には蒼く凝つて淵
かと思はるゝのもあつた。岩角、松、松には藤が咲
き、巖膚には、つゞじ、山吹を鏤めて、御佛の紫摩
黄金、鬼の舌、また僧の袈裟、また將軍の緋緘の如
く、ちら／＼と水に映つた。

「此處も海ではなかつたか――いまの松島
の。・。・。此の巖は、一つ一つ、あの島のや
うに――」

一方は、ひしや／＼とした、何處までも蘆原で、
きよつ／＼、きよつ／＼、と蘆一むらづゝ、順に、
ばら／＼と、又飛々に、行々子が鳴きしきつた。

それから、しばらくは、まばらにも蘆のある處に
は、皆行々子が鳴いて居た　　ー
こゝに、蛙の鳴くやうに

まだ、其の頃は、海ある方に雲の切れた、薄青い
空があつた。それさへいまは夢のやうである。

園は、行々子の鳴く音におくられつゝ、蛙の聲に
迎へられたやうな氣がした。

．．．．．水鶏が走るか、さら／＼と、ソレまた小
溝が動く。．．．．．動きながら其の靜寂さ。

唯、遠くに、行々子が鳴きしきつて、こゝに蛙が
すだく　　ー　　其の間を、わあ　　ー　　とつないで、
屋根も門も見えないで、あの、遅櫻の山のうらあた
り、學校の生徒の、一齊に讀本の音讀を合す聲。

園は心も氣も漠と成つた。

パイ、キリ／＼と雲雀が鳴くと、ぐらりと激しく
俣が揺れた。

「あゝ、車夫。」

酷い道だ。

「降りよう、ー 降りよう。」

「何、旦那、大丈夫で、昨日も此處を通つたぢね、馴れてるだよ。」

「いや、昨日も、はら／＼したつけが、まだ濡れて居たから、輪をくつて、お前さんが挽きにくいまでも、まだ可かつた。泥濘が薬研のやうに乾いたんぢやあ、大變だ。轉んだ處で怪我もしまいが、・・・此の咲いてる花に極が悪い。」

道のゆく手には、藁屋が小さく、ゆる／＼蜿る路に顯れた背戸に、牡丹を植ゑたのが、あの時の、子爵夫人のやうに遙に覗いて見えた。

「はゝゝ、旦那、御風流だ。」 それから、歩行

きながら、

「東京から來らつしやる方は、誰方も花がお好きだアなあ。」

「いろんな可愛いのが、路傍に咲いて居るんだ。誰だつて悪くはあるまい。」

「此方人等は、實の成る奴か、食へるんでなくつ

ては、黄色いのも、青いのも、小こいものを、何に
すべいよ。」

と笑つた。が、ふと、汗ばんだ赭ら顔の、元氣ら
しい、若いのが、唇をしめて……眞顔に成つ
て、

「然うだ、然うだ、思ひつけた。旦那、あなた様、
とこなつと言ふ草は知つてるだかね。」

「常夏。」

「それよ。」

「撫子の事ぢやあないか。」

「それよ。――矢張り……然うだ。――
忘れもしねえ。……矢張り同じやうな事を
言はしつげが、私等にや其の撫子が早や分んねえだ。
――何ね、今から、二三年、然うだねえ、彼れ
これ四年には成るずらか。東京から來なさつたな、
そりや、何うも容子たら、容色たら、そりや何うも
美しい若い奥様がな。」

「一人かい。」

「へ、い、お二人づれで。」

――旦那様は、洋

服で、それ、繪を描く方が、こゝへぶら下げたておいでなさる、あの器械を持つて在らしつけえ。――忘れもしねえだ、若奥様は、綺麗な縫の肩掛を手に持つてよ。紫がかつた黒い處へ、一面に、はい、櫻の花びらのちら／＼かつた、コートをめしてな。

園はゾツとした。

「丁ど今頃だ――それ／＼、それよ矢張り此の道だ。……私と忠藏がお供でやしたが、若奥様がね、瑞巖寺の欄間に舞つてる、迦陵頻伽と言ふ聲でや、

――あの夏になると、此の邊に常夏が澤山咲きませうね――

へい、其の常夏を知らねえだ。

――まあ、撫子の事なんだよ――

其のさ、撫子を知らねえだ。私は汗を流したでなあ。

折があつたら、誰方ぞ、聞かう思つて、因果と因縁で三年経つたぞ。旦那、花がお好きだで、

な、どんな草葉だかこゝ等にあつたら、一寸つまんで教へてくませえ。」

「淡紅色の、優しい花だが此の邊には屹とあるね、あるに違ひない。葉だけでも私にも分るだらう。」

と、のつかゝつた勢で、溝を越さうとして、

「お待ち。」

園は、つと俾に寄つた。

バスケットを開けて、其の花が、色のまゝ染まつた、衣繪さんの友染を、と思つた……其時である。車夫が、

「あつ。」

と口を開けて、にやりとして、

「へ、へ、轉ぶと、そこの花に恥かしい。・

・……うつ、へ、へ、御尤もだ。旦那は目が早い

だやあ。」

「何だ。」

「へ、へ、私あまた、眞個の草葉の花かと思つ

たぞ。」

「何だよ……」

「なんだよつて、へ、へ、へ。そこな、酸模草、蚊帳釣草の彼方に、きれいな花が、へ、へ、花が、うつむいて、草を摘んで居なさるだ。」

「え。」

「やー 旦那、ー 旦那でがせう。其方を見ながら。招かつしやるは。」

「これ。」

「や、私で、ー へい、私で。」

と、きよろりとしながら、

「へい、へい。」

俣を横に、つか／＼と、田の畔へ、挽いて乗掛けると、白い陽に、影もな／＼、ぽんと立つて、ぺこ／＼と叩頭をした。

「へい、其が、へい、成程、其が、常夏で、へ

い。」

とまた叩頭をした。が、ゑみわれるやうに、得もいはれぬ、成佛しさうな笑顔を向けて、

「旦那、旦那、旦那……」

「何。」

「あなた様にも、御覽なせえと……若奥様

が。
」

園は、魂も心も宙を踏んで衝と寄つた。

空に一輪、蕾を添へて、咲いたやうに、其の常夏の花を手にした、細りと白い手と、櫻ぢらしの紫紺のコート。

「衣繪さん・・・」

品のいゝ、藤紫の鹿子切の、圓鬚つやゝかな顔を見た時。

「ぎやツ。」

と喚くと、梶棒をたゝき投げて、車夫は雲雀と十文字に飛んで遁げた。

寂寞と成る。蛙の聲の小やんだ間を、何と、園は、はずみでころがり出した袂紗の銀の鍋に、靈と知りつゝ、其の靈の常夏の花をうけようとした。

然り、銀の鼎を捧げた時、園は聖僧の如く、身も心も清しかつた。

襟をあとへ、常夏を指で少し引いて、きやしやな撫肩をやゝ斜に成つたと思ふと、衣繪さんの顔は、睫を濃く、凝然と視ながら片手を頬に打招く。・・

・ ・ ・ 捷しなふ、白しろき指先ゆびさきから、月つきのやうな影かげが流ながれた。

寄よらうとすると、其その手も映うつる、褻つまも映うつる、裳もすそに眞蒼まつさをな水みづがある。

また招まねくのを、ためらふと、薄雲うすくものさすやうに、面おもてに颯さついと氣色けしきばんで、常夏とこなつを八ツと銀ぎんの鍋なべに投なげて寄越よこした。

其その花はなの影かげも映うつつた。が、いまは、水みづも火ひもと思おもつた。

「御免ごめんなされや。」

背中せなかに、むつとして、いきれたやうな可厭いやな聲こゑ。

此これは、と視みると、すれ違ちがつて、通とほり状ざまに振向ふりむいたのは、眞夜まよなか中の雨あめに餛飩うどんを食くつた、髪かみの毛けの一筋すぢならば、唇くちびるの爛たぐれたあの順禮じゆんらいである。

見みる端はしに、前齒まへばの抜ぬけた、汚きたない口くちでニヤリとした。車夫くるまやが、其その道みちを、小ちひさく成なつて、遁にげる、遁にげる。

はや、幻影まぼろしは消きえつゝ、園そのは目めの前まへに、一さ座ざ、藤ふぢつゝじを鏤ちりばめた、大巖おほいはの根ねに、藍あゐの如ごとき水みづに臨のぞんで、足あしは、めぐらした柵さくを越こえたのを見出みいだした。

杵きね（キネ。）が池いけと言いふ、人ひとを取とる水みづよ、と後のち
に聞きく。

衣繪きぬえさんに、其その稱となへの似にかよ通よふそれより、尚なほ、な
つかしく、涙なみだぐまるゝは、銀ぎんの鍋なべを見みれば、いつも、
常夏とこなつの影かげがさながら植うゑたやうに咲さくのである。

【完】